

「裏磐梯紀行(13)」

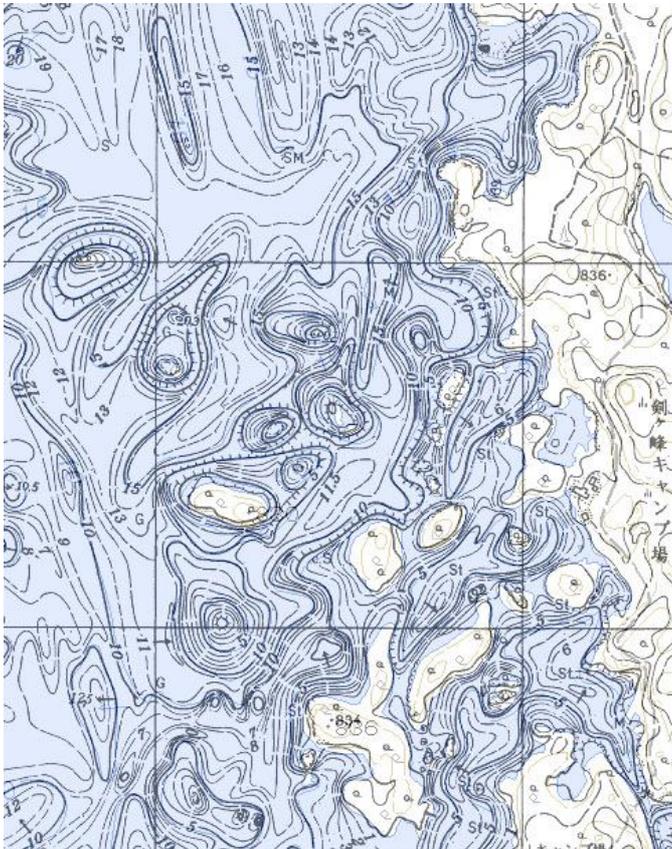
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

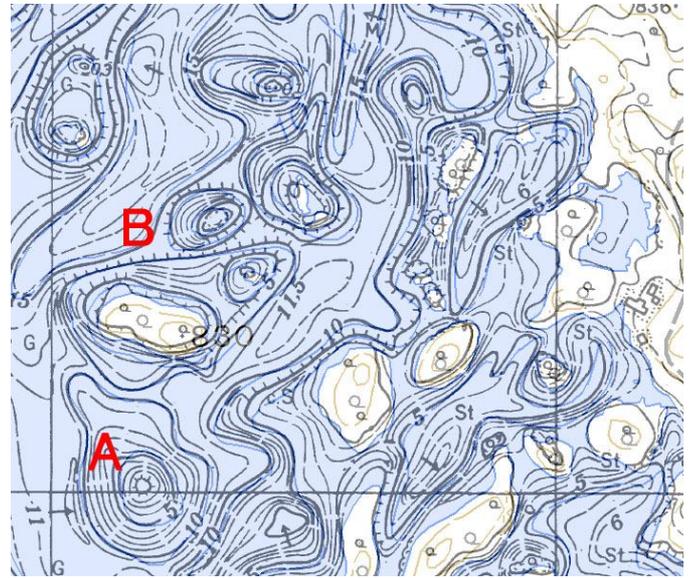
田中 千尋 Chihiro Tanaka



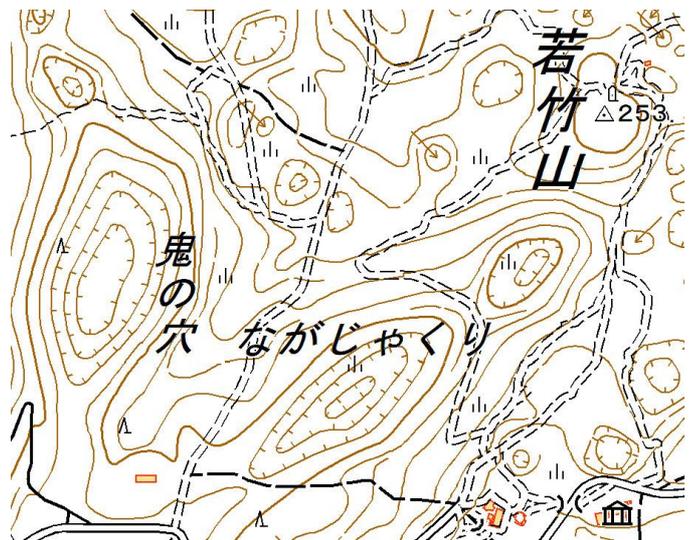
磐梯山の山体崩壊によって押し流された「流れ山」は、陸上だけでなく、桧原湖の湖面にもたくさん顔を出している。現在はその上に樹木が繁茂し、桧原湖独特の景観を形成している。



「流れ山」は、陸上や湖上だけでなく、実は湖底にも多数存在する。そのことは、湖沼図を見るとよくわかる。湖沼図は、1mごとの実線等深線と、0.5mごとの破線等深線で描図され、非常に精密だ。



湖沼図は、平均湖面標高からの水深を「等深線」で表現している。等深線に付与されている数値は「平均水深」で、数値が小さいほど浅いことを意味する。たとえばAの「湖底流れ山」は、「頂上」の水深は1m以下とわかる。その地点までボートで行けば、水面から「山頂部」が見えるだろうし、背の高い人が湖に入れば足がつくだろう。喫水の深いモーターボートでは、船底が当たってしまうし、渇水期には、湖面に現れるかも知れない。Bあたりの等深線の表記方法も興味深い。他の場所よりも浅い湖底地形の場合、外側に突起がついている。またところどころ↓の記号もあり、これは他の湖底より深いことを意味している。



これらは、陸上の地形図の表記と似ている。上図は山口県秋吉台の地形図だ。カルスト地形特有の「ドリーネ」や「ウバーレ」が点在し、等高線の内側に突起がある「おう地」として表現されている。小さなおう地(小おう地)は、↓で表現されているのも、湖沼図と似ているのが面白い。